

## 「願いのバトン」

「日本速い、速い。結果は…なんと、三位。日本銅メダル。日本陸上界にとって、記念すべき銅メダル。四〇〇mリレーにおいて、日本、快きよ達成です。」

二〇〇八年、北京オリンピック大会。日本は四〇〇mリレーで銅メダルをかく得した。日本中がわいたしゅん間だ。第一走者は塚原選手、第二走者は末次選手、第三走者は高平選手、そして、第四走者は朝原選手。朝原選手は日本の短距離走を引っ張ってきた選手だ。四大会オリンピック出場という記録を持ち、チームのリーダーだ。

フライベートでも仲の良い四人は、今までにいくつものレースで何度もバトンをつないできたのだった。

日本には強豪国に負けない武器があった。それはアンダーハンドパスだ。従来の上からバトンをわたすオーバーハンドパスとちがいで、相手の手の下からバトンをわたすため、素早いバトンパスができる方法だ。しかし、アンダーハンドパスは高度な技術が必要だった。しかも、失敗する可能性が大きいため、他の国では行われていない方法だった。日本が世界の強豪国と互角に戦うためには、これを成功させることが絶対に必要だ。成功させるかぎは、多くの練習と、そして何よりもチームワークだった。

朝原選手は、

(このチームでアンダーハンドパスを絶対完成させるぞ。)

という、強い思いを持って練習に臨んだ。

練習を始めたころは、「あ、落としたり!」「うまくわたせない!」と、ミスを連発した。何回練習しても、なかなかうまくバトンをわたすことができなかった。

(自分たちでは無理なのかもしれない。)

と、このとき、塚原選手は感じた。末次選手も高平選手も同じことを感じていた。

しかし、リーダーの朝原選手は、

「なんでうまくいかなかったん？」

と、失敗のたびごとに、熱心に語りかけるのだった。

チームのみんなで話し合う機会が増えていった。それとともに、練習量も確実に増えていった。

そして、ついに初めて全員が成功することができたときには、

「やったー」

と、みんなで抱き合って、子どものように喜んだ。

（朝原さんに絶対後かいはさせたくない。この人になっ得してもらえれば、結果は必ずついてくる。朝原さんにメダルを！）

三人の選手たちは、チームを励まし引っ張ってくれる朝原選手の気持ちに応えたいと思うようになっていた。

練習を重ねるごとに、アンダーハンドパスの成功率は、日に日に高まっていった。

二〇〇八年、北京オリンピック開催。朝原選手にとって最後となるオリンピックだ。決勝進出を目標にして臨んだ

一〇〇m走では、満足な走りができず、朝原選手は準決勝に出場することさえできなかった。

また、三人の選手たちも個人の競技において満足する結果が出せないでいた。末次選手は悔しさと胸が張りさけそうだった。塚原選手においては、太ももを痛めてしまった。それぞれが不安を抱えていた。

そんな中、四〇〇mリレー予選では、なんと起こりえないようなことが起きていた。日本のライバルとなる強豪国が、バトンパスのミスを連発し、失格となったのだ。日本は予選全体三位通過だった。

四〇〇mリレー決勝の直前、朝原選手は必死で重圧にたえようとしていた。

「朝原さん、ぜったいに渡しますから、思い切り出てください。」

高平選手が力強く声をかけた。

第三走者の高平選手と朝原選手は、アテネオリンピックからずっとバトンをつないできた。高平選手との間でバトンがわたらなかつたことは、これまで一度もなかつた。

(絶対にわたす、必ずうけとる。)

この思いが二人のきずなとなっていた。

各国の第一走者がスタートラインについた。そのとき、塚原選手は高ぶる気持ちをおさえられないでいた。

(この一本にかける。足よ、こらえてくれ。絶対にバトンをわたす。)

「パーン！」というピストルの合図とともに、塚原選手は飛び出した。ぐんぐんスピードに乗った。いい走りだった。

第二走者の末次選手へのアンダーハンドパス成功。末次選手はただひたすらに前だけを見てけん命に走った。自分個人の成績のことなど、もう頭になかった。

第三走者の高平選手へのアンダーハンドパス成功。その直後、第五レーンを走るジャマイカのボルト選手が内側から一気に高平選手をぬき去った。しかし、高平選手の目には映らなかつた。彼が見つめていたのは、陸上を志して以来、ずっと追いつけてきた人、朝原選手の背中だけだった。

あらかじめ決めておいたポイントを高平選手が踏もうとするやいなや、朝原選手は飛び出した。

「ハイ！」



背中に聞こえた高平選手の声に、朝原選手はうしろに引いた左手を大きく広げた。その手の中にバトンが吸い込まれた。

バトンがわたると、高平選手は無意識に、

「行けー」

と、叫んでいた。

朝原選手はゴールしか見ていなかった。すると、ふいに今までに感じたことのないような感覚にとらわれた。体が軽く感じられた。そのままゴールへ飛び込んだ。

朝原選手は自分が何位でゴールしたのかわからなかった。すぐに電光掲示板を見上げて祈った。

『3 JAPAN』

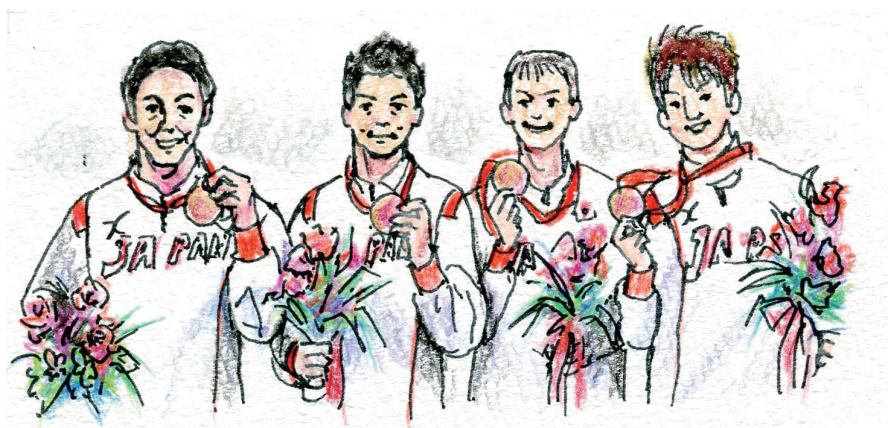
「やったー」

朝原選手はバトンを上を高々と投げ、高平選手を抱きしめた。飛ぶようにかけよってきた塚原選手、末次選手とも抱き合って喜んだ。みんなが泣いていた。

堂々の三位、日本銅メダル。日本のタイムは三八秒一五だった。

栄光のゴールへと朝原選手がつかないだもの、それはみんなの願いのバトンだった。

(遠藤 信幸の作品による)



# 願いのバトン

(高学年 2-(3))

## (1) ねらい

互いを理解し信頼し合う大切さを認め、学び合って友情をより一層深めようとする心情を育てる。

## (2) 資料の特質

朝原選手を中心に、練習中何度もバトンパス失敗を繰り返したときや、レース本番にメンバーからのバトンを待つときの心情などを考えさせることを通して、メンバー相互の信頼関係の絆の強さ、仲間を信じて直向きに努力する心の素晴らしさに迫りたい。メンバーを信頼する朝原選手の心情の根拠について問うことにより、信頼感の根底には厳しい試練を乗り越えてきたメンバーへの理解や切磋琢磨し合ったメンバーへの尊敬の念があることに気づかせたい。

## (3) 展開例

- 1 友達とはどのような存在なのか話し合う。
- 2 資料「願いのバトン」を読んで話し合う。
  - ①アンダーパスの練習がうまくいかず、失敗を繰り返したとき、朝原選手はどんなことを考えたか。
    - ・リーダーの自分が諦めてはダメだ。
  - ②高平選手からのバトンパスを待っているとき、朝原選手は心の奥でどんなことを思ったか。
    - ・ぼくは高平を信じる。きっとバトンを渡してくれる。
  - ③高平選手からバトンを受け取った瞬間、朝原選手はどんな気持ちだったか。
    - ・みんなの期待に応えるぞ！
- 3 友情について自分を振り返り考える。
- 4 実際の映像を視聴しまとめる。

## (4) 指導上の留意点及び工夫

展開例3では、「信頼し合うためにはどんなことが大切か」と投げかけ、ワークシートに書かせ発表し合うようにする。実際の友達を想定させながら考えさせるようにする。

〔本文イラストは東京学芸大こども未来研究所による〕